The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「主」と「客」 : 兵家と道家を中心として
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2015, 49, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61300
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「主」と「客」

――兵家と道家を中心として――

湯浅 邦弘

キーワード：主／客／『老子』／『孫子』／銀雀山漢墓竹簡

序言

「主」と「客」とは典型的な対義語である。一般には、主人と客人を表すが、哲学の用語としては、主体と客体、主観と客観などを意味する。

『説文解字』に「主、燈中火主也」とあり、「主」の原義は灯心。借りて「主人」の意を表す。一方、「客」は、『説文解字』に「客、寄也」とある。ただ、「客」の原義は、外地から他郷に来ている人であり、「寄寓」とする『説文解字』の解説は引申義であるとされる。また、特に外国から来て官職に就いている人を表す場合もあり、有名な「逐客令」は、そうした「客」の用例である。『史記』秦始皇本紀に、「李斯上書説、乃止逐客令」とある。

それでは、こうした「主」「客」の意味は、中国古典の中で、ほぼ一定していたと考えて良いのであろうか。以下

では、特に、諸子百家の時代の兵家と道家の文献を取り上げ、そこに特徴的に見られる「主」「客」の用例について検討してみることとしたい。

一、『老子』の「主」と「客」

まず、道家の『老子』を取り上げる。『老子』第三十五章に、「樂與餌、過客止（楽と餌とには、過客も止まる）」とある。音楽とご馳走には旅人も足を止める、という意味で、ここでの「客」は旅人を指す。これは、中国古典の中でも最も一般的な用例であり、例えば、『論語』の中に見られる「客」も、同類の用例である。(1)

ところが、『老子』第六十九章には、次のような「主」「客」の用例が見える。

用兵有言曰、「吾不敢為主而為客、不敢進寸而退尺。」

兵を用うるに言有りて曰く、「吾敢て主と為らずに客と為る。敢て寸を進めずして尺を退く」。

ちなみに、右の引用は、新出土テキストの北京大学竹簡本に基づいているが、諸本でも大きな相違はない。念のために、代表的なテキストを対照させて記せば、次のようになる。(2)

［北京本］　用兵有言曰、吾不敢爲主而爲客、不敢進寸而退尺。

［馬王堆甲本］　用兵有言曰、吾不敢爲主而爲客、不　進寸而芮尺。

［馬王堆乙本］　用兵又言曰、吾不敢爲主而爲客、不敢進寸而退尺。
［傅奕本］　用兵有言曰、吾不敢爲主而爲客、不敢進寸而退尺。
［河上公本］　用兵有言、　吾不敢爲主而爲客、不敢進寸而退尺。
［王弼本］　用兵有言、　吾不敢爲主而爲客、不敢進寸而退尺。

要するに、「曰」字の有無が違うというだけであり、「主」「客」の箇所自体には揺れは見られない。そこで、この「主」「客」をどのように理解するかということであるが、通常、以下のように解釈されている。

用兵の言葉として次のようにいう、「自分は決して主体とならずに受け身となる。一寸も進もうとはせず一尺でも多く退く」と。

すなわち、「主」は主動、「客」は受け身、という理解である。積極・消極と言い換えることができるかもしれない。そして、ここで問題となるのは、これが「用兵」の言葉だとされている点である。

例えば、木村英一・野村茂夫補『老子』（講談社、一九八四年）は、「この章も多くの成語から成るようである。「吾不敢為主而為客、不敢進寸而退尺」は「客・尺」と一韻であり、用兵家の用いていた成語であろう」とする。また、池田知久『馬王堆出土文献訳注叢書老子』（東方書店、二〇〇六年）も、「以下の文章は、当時の兵家のことばを引用したものであろうか」と指摘する。

「主」「客」自体の理解には問題ないであろう。用兵の極意として、「客」の立場となることを説いたものである。

戦争では、主導権を握ろうとして前進しがちであるが、その気持ちを押さえて、むしろ退くことを考えよというのである。軍事においても、無為無欲であることが逆に勝利を呼び込むとの教えである。

同様の思想は、実は、その直前の第六十八章にも見える。

善爲士者不武。善戰者不怒。善勝敵者不與。善用人者爲之下。是謂不爭之德。是謂用人之力。是謂配天之極。

善く士為たる者は武ならず。善く戰う者は怒らず。善く敵に勝つ者は与にせず。善く人を用うる者は之が下と為る。是れを不争の徳と謂う。是れを人の力を用うと謂う。是れを天に配する古の極と謂う。

真の武士は猛々しくない。戦上手の者は怒りを露わにしないという。第六十八章と第六十九章は、ともに「武」について説き、しかも一見消極的な態度が良いとする共通性を持っていると言えよう。これは、「無爲而無不爲（無為にして而も為さざる無し）」という『老子』の屈折した思想を、軍事面に応用したものと考えられる。

ただ、第六十九章に見える「主」「客」の対比を、「兵家」者言の引用と理解して良いであろうか。そこで、以下では、『孫子』を初めとする兵家の「主」「客」を確認してみよう。

二、『孫子』の説く「主」「客」

まず、『孫子』にも、賓客という意味での「客」の用例はある。

孫子曰、凡用兵之法、馳車千駟、革車千乗、帶甲十萬、千里饟糧、則内外之費、賓客之用、膠漆之材、車甲之奉、日費千金、然後十萬之師舉矣。（作戦篇）

孫子曰く、凡そ用兵の法は、馳車千駟、革車千乗、帯甲十万、千里にして糧を饟（おく）るときは、則ち内外の費、賓客の用、膠漆の材、車甲の奉、日に千金を費やして、然る後に十万の師挙がる。

これは、『老子』第三十五章と同じように、外来の客（使節団）という意味での使用例である。十万の軍隊を動員する際には、この「賓客之用」を含めて、莫大な戦費が必要になるとの主張である。

しかし、軍事用語としての使用例は、これとはまったく異なる。例えば、次の通りである。

凡爲客之道、深入則專、主人不克。掠于饒野、三軍足食。謹養而勿勞、併氣積力、運兵計謀、爲不可測。投之無所往、死且不北。死焉不得。士人盡力。（九地篇）

凡そ客為るの道、深く入れば則ち専らにして、主人克（か）たず。饒野に掠（かす）むれば、三軍も食に足る。謹め養いて労すること勿（な）く、気を併せ力を積み、兵を運（めぐ）らして計謀し、測るべからざるを為す。之を往く所無きに投ずれば、死して且つ北（に）げず。死焉（いずく）んぞ得ざらん。士人力を尽くさん。

この一節は次のように理解される。およそ遠征軍を編成して敵地に赴く場合（客）の原則は、敵の国境を越えて遙かに深く侵攻すれば、士卒は気力を充実させ必死となって戦うので、本国にあって迎え撃つ敵（主人）はこちらに対抗することができない。肥沃な土地で農作物を掠奪すれば、軍隊の食糧も充足する。その食糧で士卒を充分に休養さ

せて疲れさせず、士卒の気をみなぎらせ全力を尽くさせ、軍隊を巧みに運用して策略をめぐらし、敵にこちらの動きを予測させないようにする。兵をあえて敵中深く侵攻させ、勝利のみが帰還を約束するという状況に追い込めば、かれらは死力をつくして奮戦し、敵前逃亡するようなことはない。どうして必死の覚悟をいだかないことがあろうか。かれらは全力をつくして働くであろう。

ここでは、「客」と「主人」が明快に対比されている。「客」は他国への侵攻軍、「主人」は、それを根拠地にあって迎え撃つ側である。そして、『孫子』は、「客」の側の要諦として、中途半端にならないことをあげる。いつでも母国に帰還できるというのであれば、士卒の心は前向きにはならない。国境線を越えるのであれば、大胆に敵地の奥深くに侵攻し、帰国するためには、この一戦に勝利する以外にはないという覚悟を士卒に植えつける必要がある。死にものぐるいで戦うから、活路も開けてくる。また、そのような来敵（客）を迎える側（主人）も、根拠地にいるからといって安心はできない。母国で戦うという安心感が、逆に劣勢を招いてしまうからである。

この主張は、基本的には、「客」の側が様々な困難を抱えていて不利であることを前提にしたものであろう。同じく九地篇の末尾では次のように説く。

凡爲客之道、深則專、淺則散。（九地篇）

凡そ客為るの道は、深ければ則ち専らにして、浅ければ則ち散ず。

国境線を越えて深く敵地に侵攻した場合は、士卒は一致団結するが、中途半端に浅く侵攻した場合には、逃散してしまうという意味である。「客」は長距離を進攻するので、その過程で様々な困難が伴うことを説く。そこで『孫子』

は、同じく九地篇の冒頭で、敵国深く進入した場合、そこを「重地」、浅く進入した場合、そこを「軽地」と定義していた。進攻距離の度合いによって、その留意点も変わってくるというのである。

更に、行軍篇では、「水」の戦いという観点から「客」に注目している。

絶水必遠水、客絶水而來、勿迎之于水内、令半渡而擊之、利。欲戰者、無附于水而迎客。視生處高、無迎水流。此處水上之軍也。（行軍篇）

水を絶てば必ず水に遠ざかり、客 水を絶ちて来たらば、之を水の内に迎うる勿く、半ば渡らしめて之を撃つは、利なり。戦わんと欲する者は、水に附きて客を迎うること無かれ。生を視て高きに処り、水流を迎うること無かれ。此れ水上に処るの軍なり。（行軍篇）

これは、沼沢地や川での戦い（川のほとりにいる軍隊）の留意点である。「客」の渡河については、川の中で対峙せず、途中まで渡らせた時点で迎撃する。いずれにしても川の付近で戦うことは禁物であるとする。また、川の下流にいて上流からの敵に対峙してはならないという。ここでの「客」も、敵の侵攻軍を意味する。そして、渡河してくる敵を迎撃する手段が明確に説かれている。

要するに『孫子』では、「賓客」の一例を除いて、「主」「客」が軍事用語として使われており、基本的には「客」の側が不利であることを説くのである。

三、兵家の「主」と「客」

このように、『孫子』では、「客」「主人」に注目すべき意味が見られたのであるが、それは、『孫子』独自のものであろうか、それとも、他の兵書にも見える軍事用語と理解すべきなのであろうか。

そこでまず、銀雀山漢墓竹簡の兵書を取り上げてみよう。[3]『銀雀山漢墓竹簡［貳］』所収の「論政論兵之類」に含まれる「十問」篇には、次のように、「客主」という用例が見える。

兵問曰、交和而舍、糧食均足、人兵敵衡、客主兩懼。敵人圓陣以胥、因以爲固、擊【之奈何。曰】、擊此者、三軍之衆分而爲四五、或傅而佯北、而示之懼。……此擊圓之道也。

兵問に曰く、和を交えて舍し、糧食は均しく足り、人兵は敵衡にして、客主両(ふたつ)ながら懼る。敵人円陣にして以て胥(ま)ち、因りて以て固めを為せば、之を撃つこと奈何。曰く、此を撃つには、三軍の衆、分かちて四五と為し、或いは傅(せま)（薄）りて佯北し、而して之に懼るるを示す。……此れ円を撃つの道なり。

『銀雀山漢墓竹簡［貳］』の原注は、この「客主」について、「客指進攻的一方、主指守禦的一方」と解説する。妥当な注釈であろう。外敵と対峙した場合の要諦を説く一節である。敵が堅い円陣を作っている場合には、自軍の兵力を分割して攻撃を加え、時に「佯北」（偽りの敗走）をして敵を混乱させる。これが敵の円陣を撃破する方法であるという。

また、この篇の末尾にも、同様の用例が見える。

交和而舍、客主兩陣、敵人形箕、計敵所願、欲我陷覆、擊之奈何。擊此者、渴者不飲、饑者不食、三分用其二、期於中極。彼既□□、材士練兵、擊其兩翼、□彼□喜□□三軍大北。此擊箕之道也。

和を交えて舍し、客主両ながら陣し、敵人箕を形どり、敵の願(つつし)む所を計るに、我が陷覆を欲す、之を撃つこと奈何。此を撃つには、渴する者も飲まさず、饑うる者も食わせず、三分して其の二を用いて、中極を期す。彼既に□□、材士練兵もて、其の両翼を撃ち、□彼□喜□□三軍大いに北(に)ぐ。此れ箕を撃つの道なり。

ここでも、「客主」と述べた後、「客」を「敵人」と言い換えている。敵が「箕」の陣形を構築して、我が方の転覆を企図している場合について論じたものである。そのような時は、必死の覚悟で全軍を三分割して、有能な選抜兵士で敵の両翼を攻撃するという。いずれにしても、「客」「主」が重要な軍事用語とされている状況が理解されよう。

更に、銀雀山漢墓竹簡には、この「主」「客」そのものを専論する篇もある。それが、「客主人分」篇である。

兵有客之分、有主人之分。客之分衆、主人之分少。客倍主人半、然可敵也。負……定者也。客者、後定者也。主人安地撫勢以胥。夫客犯隘逾險而至。

兵に客の分有り、主人の分有り。客の分は衆く、主人の分は少なし。客は倍し主人は半ばにして、然して敵すべきなり。負……定者也。客なる者は、後に定まる者なり。主人は地に安んじ勢いを撫して以て胥(ま)つ。夫の客は隘を犯し険を逾(こ)えて至る。

念のため、現代語訳すれば、次のようになる。戦闘には客（他国の領域内に侵攻する部隊）の分と主人（自国の領域内にあって防衛する部隊）の分とがある。客の分は多く必要となり、主人の分は少なくてすむ。客は二倍の兵力、主人は半分の兵力で、ようやく匹敵する。負……（主人は先に防衛体制を）定めているものである。客は後から攻撃態勢を定めるものである。主人は地形を助けとし形勢を保って敵の到来を待つ。かの客は隘路を犯し危険を越えてやって来る。

この篇の特色は、客と主人の「分」（分量・能力）について端的な解説をしている点である。遠征軍を編成して他国の領域内に深く侵攻する「客」の側には、多くの兵力が必要であり、客は二倍の兵力、主人は半分の兵力で、ようやく「敵」（対等）の関係になると説く。また、主人の側は、先に防衛体制を整えることができるのに対して、客は後から攻撃態勢を定めることになり、また、主人の側は、地形や形勢の利を活かして敵の到来を待つことができるのに対して、客は危険の待ち受ける遙かな道程を強行しなければならないという。

このような「客」の側の困難さについては、すでに『孫子』も説いていたが、この「客主人分」篇は、そのことをより明快に説いていると言えよう。

なお、この「客主人分」篇は、もと『孫臏兵法』の一篇とされていたものであるが、『銀雀山漢墓竹簡［貳］』の刊行に際して、「論政論兵之類」として再編されたものである。仮に『孫臏兵法』ではなかったとしても、この篇はやはり、基本的には『孫子』の「客・主人」観を継承し、更に、その力関係を「倍」「半」という具体的な比率で示したものであろう。

同じく銀雀山漢墓竹簡の中で「客」「主」に言及するものとして、「五名五恭」篇がある。そこでは、次のように説かれている。

入境而暴、謂之客。再舉而暴、謂之華。三舉而暴、主人懼。

境に入りて暴なれば、之を客と謂う。再挙して暴なれば、之を華と謂う。三挙して暴なれば、主人懼(おそ)る。

ここでは、国境を越えて敵の領内に侵入し、乱暴を働く敵を「客」と定義し、それが二度目になると「華」、更に三度目となって過激の度合いを増すと、「主人」の側も恐懼することになるという。「客」の侵攻を三段階に分けて説く点に大きな特色が見られるが、「客」「主人」自体の定義は、右の諸例と同様である。

これら出土文献だけではなく、伝世テキストでも同様に、兵学用語としての「主」「客」が存在する。まず、『尉繚子』には次のように見える。

凡守者、進不郭圍、退不亭障、以禦戰非善者也。豪傑雄俊、堅甲利兵、勁弩強矢、盡在郭中、乃收窖廩、毀拆而入保、令客氣十百倍而主之氣不半焉。敵攻者、傷之甚也。然而世將弗能知。(守権篇)

凡そ守る者、進みて郭囲せず、退きて亭障せずして、以て禦ぎ戦うは善なる者に非ざるなり。豪傑雄俊、堅甲利兵、勁弩強矢、尽く郭中に在り、乃ち窖廩(こうりん)を収め、毀拆して入りて保つは、客気をして十百倍して主の気をして半ばならざらしむ。敵攻むれば、之を傷うこと甚しきなり。然れども世の将は知る能わざるなり。

防御施設が不備であると、客(敵侵攻軍)の士気は百倍となり、主(守備隊)の士気は減退してしまう、と説いている。ただ、『尉繚子』では、『孫子』や銀雀山漢墓竹簡の兵書とはやや異なり、「主」「客」以外に、救援軍の重要性を指摘する。

攻者不下十餘萬之衆。其有必救之軍者、則有必守之城。無必救之軍者、無必守之城。

攻むる者十余万の衆を下らず。其れ必ず救うの軍有る者は、則ち必ず守るの城有り。必ず救うの軍無き者は、必ず守るの城無し。

戦国時代に入り、戦争が複雑化し、単に「主」「客」の対峙というだけではなく、第三の存在すなわち救援軍の有無が戦局を左右するという事態を想定したものであろう。

ただ、「主」「客」そのものの定義は、まったく同様である。伝世兵書の「主」「客」はほぼ同様と考えて良いであろう。時代は降って、唐の李靖の兵書とされる『李衛公問対』においても、こうした「主」「客」が重要な論点とされている。

太宗曰、兵貴爲主不貴爲客、貴速不貴久何也。靖曰、兵不得已而用之。安在爲客且久哉。孫子曰、遠輸則百姓貧。此爲客之弊也。又曰、役不再籍、糧不三載。此不可久之驗也。臣校量主客之勢、則有變客爲主、變主爲客之術。太宗曰、何謂也。靖曰、因糧於敵、是變客爲主也。飽能飢之、佚能勞之。是變主爲客也。故兵不拘主客遲速、唯發必中節、所以爲宜。（巻中）

太宗曰く、兵は主為るを貴び客為るを貴ばず、速を貴び久を貴ばざるは何ぞや。靖曰く、兵は已むを得ずして之を用う。安くんぞ客為り且つ久しきに在らんや。孫子曰く、遠く輸すれば則ち百姓貧しと。此れ客為るの弊なり。又曰く、役は再籍せず、糧は三載せずと。此れ久しくすべからざるの験なり。臣、主客の勢を校（較）量すれば、則ち客を変じて主と為し、主を変じて客と為すの術有り。太宗曰く、何の謂いぞや。靖曰く、糧を敵に因

るは、是れ客を変じて主と為すなり。飽けば能く之を飢えしめ、佚なれば能く之を労せしむ。是れ主を変じて客と為すなり。故に兵は主客遅速に拘わらず、惟だ発して必ず節に中(あた)るは、宜と為す所以なり。

ここで太宗は、軍事において「主」となるのを尊び「客」となるのを尊ばないのはなぜか、また、「速」を尊び「久」を尊ばないのはなぜかと問う。この問いに対して、李靖は、「兵は已むを得ずして之を用う」るものだとし、専守防衛と短期決戦が肝要だと説く。すなわち、「客」となって他国へ進攻すること、およびそれによって長期戦となることを評価していない。基本的には「主」「速」が重視されている。これは、客（長駆侵攻軍）の側が不利だとして様々な留意点を説く『孫子』と同様である。

四、もう一つの「主」「客」

そして実は、こうした兵学における「主」「客」の定義は、兵書以外の文献においても正しく認識されている。例えば、『国語』越語下篇には、「夫聖人隨時以行、是謂守時、天時不作、弗爲人客（夫れ聖人時に随いて以て行う、是れを時を守ると謂い、天時作(おこ)らざれは、人の客と為らず）」とあり、その韋昭注に「攻者爲客」と説く。『公羊伝』でも、「春秋伐者爲客」（荘公二十八年）と定義し、『礼記』月令注に「爲客不利、主人則可」とあり、その疏に「起兵伐人者、謂之客、敵來捍禦者、謂之主（兵を起こして人を伐つ者、之を客と謂い、敵来りて捍禦する者、之を主と謂う）」と解説する。これらは、兵書の定義する「主」「客」とまったく同様である。

更に、兵書そのものではないが、『商君書』でも、軍事について言及する兵守篇に、「城盡夷、客若有從以入、則客

必罷、中人必佚矣」と見え、『墨子』にも、「敵人且至、千丈之城、必郭迎之、主人利。不盡千丈者勿迎也、視敵之居曲、衆少而應之、此守城之大體也」（号令篇）、「禽子問曰、「客衆而勇、輕意見威、以駭主人。薪土俱上、以爲羊玲、積土爲高、以臨吾民、蒙櫓俱前、遂屬之城、兵弩俱上、爲之奈何」（雑守篇）と説く。

このように、兵書では、出土文献、伝世文献を問わず、「主」「客」が重要な兵学用語として使用されており、また、兵書以外の他の文献もそのことを正しく認識していた。ただ、これは、兵学の「主」「客」が、漢字の原義をまったく無視しているというわけではない。やはり、「主」「客」の原義はそれぞれの語に内包されていると言えよう。「客」は国境線を越えて進攻してくる敵であり、「主」は根拠地にあってそれを迎え撃つ軍をいう。客人、主人という原義が軍事という場面で特殊な意味づけをされているわけである。

なお、出土資料の中で、今一つ注意を要するのは、こうした軍事の場とは異なる使用例が見られる点である。それは、睡虎地秦墓竹簡、居延漢簡、敦煌漢簡などに見える行政用語としての「客」である。要点のみを端的に述べれば、それら出土文書に見える「客」とは、客の身分で西北の辺境地で生活していた「東方」人を指す。また、「客吏民」「客民卒」などの呼称があり、「客」にも身分の相違があったことが知られる。[4]「客」は定住しない流動人口であり、特に西北地区の政治・経済・軍事・外交などにおいて、きわめて重要な存在であった。一例を挙げれば、睡虎地秦墓竹簡『法律答問』に、「何謂旅人。●寄及客、是謂旅人」とある。こうした行政上の「客」も重要であるが、やや特殊な用例であり、本稿の検討とは直接関わらないであろう。[5]

結語

このように、「主」「客」は、兵家の中で共有されていた軍事用語であった。「客」とは、自国を離れ、他国の領域に侵攻する遠征軍、「主人」とは、自国の領域内にあってそれを迎え撃つ守備軍を意味していた。そして、基本的には「客」の側に多くの兵力・物資・食糧が必要となり不利であるとされる。

とすれば、『老子』第六十九章の「主」「客」は、はたして兵家言の引用だったと断定して良いのであろうか。仮にそうだったとしても、それは『孫子』系の兵書の言葉ではないと考えるべきであろう。むしろここは兵家言というよりは、用兵に関することわざ程度の意味と理解しておいた方が良いのではないか。『老子』は「主」よりも「客」の立場となることを推奨するが、兵家は、逆に「客」となることの困難さを説く。両者の「主」「客」観は、むしろ正反対だったのである。

［注］

（1）『論語』には、公冶長篇と憲問篇に「賓客」の語が各一例見える。

（2）北京大学が二〇〇九年に入手した漢代の竹簡『老子』テキストの詳細については、拙著『竹簡学―中国古代思想の探究―』（大阪大学出版会、二〇一四年）第三部第五章参照。

（3）銀雀山漢墓竹簡の詳細については、前掲拙著『竹簡学』第三部第二章～第四章、および拙著『中國出土文獻研究―上博楚簡與銀雀山漢簡』（台湾・花木蘭文化出版社、二〇一二年）第三部分第九章～第十一章参照。

（4）この点の詳細については、王子今『秦簡称謂研究』（中国社会科学出版社、二〇一四年）参照。

（5）なお、行政用語としての「主客」はまったく別の意味である。後世の官名で、外国使節の接待をつかさどった。

［附記］

本稿は、平成二十六年度～三十年度・日本学術振興会科学研究費基盤研究B「中国新出土文献の思想史的研究―戦国簡・秦簡・漢簡―」（研究代表者湯浅邦弘）による研究成果の一部である。また、二〇一五年十月四日、香港浸會大学で開催された「「先秦經典字義源流」國際學術研討會」において「「主」與「客」―以兵家和道家為中心―」と題して中国語で口頭発表した原稿に基づいて修訂し、日本語版として定稿としたものである。

（文学研究科教授）

摘要

「主」與「客」
—以兵家和道家爲中心—

湯淺 邦弘

「主」與「客」是一對典型的反義詞，一般表示主人與客人，但在中國古典中，有時被賦予了獨特的意義。本稿中，就以兵家及道家的「主」、「客」進行探討。

首先，在《老子》第六十九章中，有「用兵有言曰：「吾不敢為主而為客、不敢進寸而退尺」」一節。這一節通常被翻譯為「作為用兵之言有如下所述:「自己不敢作為主體而寧可作為客體。不敢多前進一寸而寧可多後退一尺」」。不過問題的所在是該「用兵之言」，對此，通常認為是對兵家之言的引用。

在此，本稿對兵家中的「主」、「客」進行了探討。在《孫子》中、除「賓客」一例，「客」均用作越過國境侵略他國的攻擊軍，而「主」則均用作在根拠地進行迎擊的防衛軍的意思。而且，因為「客」方多伴隨眾多的困難，所以基本上可以看出，其中具有成為「客」則不利的認識。

《孫子》如此的「主」、「客」觀，也共通於銀雀山漢墓竹簡所收的兵書及傳世兵書《尉繚子》、《李衛公問對》等文獻中，而且在其他的文獻中，也正確認識到了軍事上「主」、「客」的定義。

因此，《老子》第六十九章的「主」、「客」，仍是以《老子》思想為基礎的用語，在兵家之言的引用一點上，尚有疑問。假使確為兵家之言，也並非為《孫子》系列的兵書。與其認為其是兵家之言，倒不如理解為，只是關於用兵的諺語程度的用語比較合理。比起「主」的立場，《老子》更主張成為「客」的立場，但相反，兵家則在論說成為「客」的困難。兩者的「主」、「客」觀，不如認為是正好相反。